

「心と身体の健康 —最近の話題—」

巻 頭 言

京都市立医科大学大学院医学研究科
精神機能病態学

福 居 顯 二

心身相関の重要性が言われるなか、疾病を広く bio-psycho-socio-ethical な面からみていく全人医療の考え方が広がりをみせています。本特集号のテーマは「心と身体の健康 —最近の話題—」です。昨年秋に（平成 21 年 11 月 15 日）同テーマで京都市立医科大学公開講座（医学科担当分）が開催されました。心と身体の疾患で精神・行動面にも症状の現れる病態で、最近話題に上っている 5 つの疾患を取り上げました。府民・市民へ講師の皆さんから大変わかりやすく丁寧にお話していただき好評でしたので、本特集号ではその講演内容に、医師、看護師等の医療従事者向けに加筆いただきました。

5 つの論文は、副題にもありますように、最近、特に話題に上っていて各年代で見られる疾患（病態）を年代順に掲載いたしました。小児期の「発達障害」、思春期・青年期の「薬物乱用」、青年期～高年期の「たばこの害」、更年期における「男性更年期障害」、そして老年期にみられる「認知症」です。

「発達障害」は、かつての「自閉症」概念から広く「自閉症スペクトラム障害」としてとらえられるようになり、新しい診断や分類について、注意欠陥／多動性障害などと併せて紹介され、対人コミュニケーションがうまくとれない症状が指摘されています。

「薬物乱用」では、最近マスコミにもよく取り

上げられる覚せい剤や大学生にも蔓延する大麻など、若者に多い乱用薬物が紹介され、長期使用によっては非可逆的な中枢神経系障害を引き起こすこともあり、薬物乱用根絶のキャンペーンが国や自治体を挙げて行われています。

「たばこの害」では、「禁煙」(non-smoking)から、「卒煙」(smoking cessation)への発想転換の必要性を挙げ、疫学的にも卒煙によって平均余命が伸びることから、「禁煙治療ガイドライン」での「5 つの A」といった有効な方法や新しい禁煙補助剤が紹介されています。

「男性更年期障害」は加齢やストレスなどにより生じる男性ホルモン分泌低下と関連しており、「加齢男性性腺機能低下症候群」とも呼ばれ、すでに広く認知されている「女性更年期障害」と共通する症状のほかに、特に「うつ状態」との関連性が注目を浴びています。

「認知症」は高齢化社会～超高齢化社会に向けて避けることの出来ない問題であり、その概念と、今後の新しい検査法、治療法、予防等について早期発見の重要性に言及して頂きました。

いずれもが、これからも医療現場で増えてくる「心と身体の疾患（病態）」と考えられ、本特集号が読者諸氏の日常の臨床や研究の一助になることを願っています。